

## 第1回 教会と洗礼

文禎顯『純粋な夜の向こうへ—新たな出発のために』  
プロローグ 1 事故の後 2 母親の日記を読む 3 思い出の場所へ  
4 ヒゼキヤトンネル  
5 理想と現実 6 自己存在の否定性  
7 悪の根源  
8 善の根源  
9 母親の日記を再び読む 10 シロアム池のほとりで 11 新しい生活へ

### 1 事故の後

あの炭鉱崩壊事故から、もう一年が経とうとする。死者 31 人、負傷者 58 人の大惨事だった。鉱夫として働いていたヒロシも、その事故に巻き込まれた。幸いにも命は助かった。暗い鉱内を掘りながら、もがいて生きる意味があるのかをずっと問い続けてきたが、事故で死に直面する経験をして以来、しばらくその問いはしなくなつた。5 ヶ月間の入院生活の後、実家があった兵庫県のある町に住まいを移して休養しているのだ。

ところがあの事故の悪夢から抜け出すことができず、まだ苦しんでいる。病院でリハビリをしたり、高校時代の友だちに会ったりして、たまに襲ってくるフラッシュバックの恐怖から逃げようとする。一方普通の人のように、今更正常な生活に戻れるかと不安がり、一歩前に踏み出すことを恐れている。

一人っ子の彼の家には、誰もいない。事故の前、いい会社に勤めていたが、上司との不和によって、退社してしまう。無職になったことが原因で妻と別居し、離婚するようになった。

もちろん子供はいない。昔彼の母親は仕事を始めた時から、一人でこの町に引っ越しして来た。だから当然近所には、親戚もいない。母親は、約 25 年前、彼が大学生の時、ガンで亡くなり、お父さんは、会ったことのない、赤の他人。否、他人というより、彼にとって、嫌悪の対象であるかもしれない。実はあの事故によるトラウマより、顔も知らないお父さんに対する憎しみと、それをどう噴出すればいいのかわからない鬱憤のほうで、深い心の傷として、長い歳月彼を苦しめているのだ。

あの事故から、命が助かったため、新しい未来へ進みたいという希望が少し湧いて来たことも事実である。しかしとても治癒できそうもない内面の傷は、依然として抉られた状態のままなので、彼は前に第一歩を踏み出すことを躊躇しているのだ。ある日、休養中のヒロシが、家で荷物を整理していた際、母親の遺品として保管していた二つの段ボール箱が目に入った。母親が亡くなった後、適当に詰め込んだので、中に何が入っているか彼には正確に分からない。

その一つの箱を開けてみたら、古びた幾つかのアルバムがあった。アルバムの中には、赤ちゃんの時から高校生の時までの写真が日付の順で、まるで映画フィルムのようにきれいにまとまっていた。誰が撮ったかわからないけれど、赤ちゃん用の小さいベッドの上で寝ているヒロシの顔に、母親が自分の顔をくっつけて笑っているシーンや、母親の背中におんぶされてあくびをしている姿や、母親に抱かれて乳を飲んでいる姿など、懐かしい思い出の写真がたくさんあった。

牧師の写真に見える人が、彼の頭の上に手を置いて祈っている写真もあった。中学生の時まで出席していた教会で、**幼児洗礼**式の時に撮ったものであろう。そしてヒロシは、その写真の下に、次のような言葉が書いてあることに気づいた。

「神様、私に与えられたこの大切な存在を守って、祝福して下さい。」

おそらく洗礼を受けた後、母親が愛する息子に対する思いをそのように記したのであろう。ヒロシは、目頭が熱くなった。そして、母親が、小学生と中学生の頃、似たようなことを自分によく言ったことを思い出した。それと同時に、考えたくもないあの衝撃的な事実が、思い浮かんで一時の安らかな静寂を破ってしまった。

### 2 母親の日記を読む

ヒロシは、小学校の時もそうだったが、特に思春期の中学生になってからは、「なぜ僕にはお父さんがいないの？」とよく母親を問い詰めた。母親は、「お父さんはお前が生まれる前に病気で死んだから」と曖昧に答えて、その場その場を逃れようとしたものだ。そのたびにヒロシも決まったように、「お父さんと別れたからなの？お父さんの写真でも見せてよ」と言い返したのだ。

お父さんの写真なんかありえないことは、偶然見た母親の日記を通して明らかになった。母親は、毎日ではないけれど、よく日記を書いていた。鍵のかかったタンスの中には、4、5冊の分厚い日記のようなものが並んでいて、「絶対タンスの中を見てはいけない」と何度も注意されていたのだ。

ヒロシが中学校 3 年生だったある日の午後、学校から帰ってきた時である。いつものように、母親は仕事に出ていて、家には誰もいなかった。ところが、いつも鍵がかかっているはずのタンスが少し開いていたのだ。彼は、一体中に何が入っているかと普段から気になっていたのを、扉を開けてみた。

中には、服や書類ばかりで、特にヒロシの関心を引くようなものは何もなかった。それで扉を閉めようとした。ただ母親の日記が少し気になったので、タンスの奥にあった日記の中で一番古く見えるものを出して、ぱらぱらと読み始めた。

そこには、ヒロシを生む前の若い母親の日常が綴られていた。ところが、レイブという言葉が目にとまった。その箇所を中心によく読んだら、母親が、自分の友だち二人と海辺に行き、そこで数人の男たちにレイブされたこと、その後、妊娠し、生むか生むまいかを悩んでいたこと、母親が通っていた教会の牧師は、母親を説得して、**妊娠中絶**するように勧めたこと、結局、迷いながらも生むことにしたことが、詳しく綴られていた。

当時、ヒロシは、それ以上読み続けることは出来なかった。母親がレイブされて、自分が生まれたことに、体が麻痺するほど大きな衝撃を受けたからである。しばらく落ちついてから、牧師が勧めた妊娠中絶の意味が分

からなかったので、辞書を調べた。すると、お腹の中の赤ちゃんを殺して、人為的にお腹の外へ取り出すということが分かった。

当時、ヒロシは二度大きなショックを受けたのだ。幼い頃自分に**洗礼**を授けた牧師が、実は自分が生まれることを望まなかったことを知って、彼は、また心が深く傷つけられた。その時から、彼は教会に行かなくなった。そして彼の心から、神の存在は消えていったのだ。また優しく信仰深い母親は、レイブで汚れた女として見え始めた。何もかもすべてが嫌になった。自分自身も嫌いになった。思春期の彼にとって、偶然読んだ母親の日記は、自分がレイブで生まれた汚れの存在であり、母親のお腹の中で殺されるべき存在、生まれてはいけない存在であることを物語ったのだ。

あれからもう **30 年**も経った。大人になった今のヒロシには、レイブで妊娠し、中絶を断念した母親が、大変な人生を生きたことを少し理解できるようになった。そして苦しい思いをしていた母親のために、妊娠中絶を勧めたあの時の牧師の立場も理解できる。もし自分があの時の牧師であったとしても、絶対そのように勧めたであろう。

むしろ彼は、自分がお腹の中で殺され、生まれなかったほうがよかったと考えてきた。それは、自分がレイブで生まれた汚れの存在であり、生まれてはいけない存在であるという認識を未だに持って、苦しい生き方をしているからだ。

それと共に、会ったことのない父親に対しては、心の奥深いところに消えない憤りを覚えている。時おり、自分をこの世に送った父親を苦しめるかのように、その血を受け継いでいる自分の存在を憎み、虐待する。だから、幸せな未来へ自分の身を投げ出すことを迷っているのだ。でも、少なくとも今は母親にも、牧師にも、そんなに悪い感情は持っていないと彼は思っている。

このようにつらい過去を回想しながら、ヒロシはもう一つの段ボール箱を開けた。その中には、何冊かの本が入っていた。よく見たら、母親の日記だった。自分につらいことばかりを告げるその日記は、もう読みたくなかった。そのまま、段ボールの中に入れて、フタを閉めた。

### 3 思い出の場所へ

リハビリも着々と進み、健康も、心の状態もだいぶよくなった。そして少し遠い町で、新しい就職先も見つけて、一ヶ月後に仕事を始めることになった。その間に、職場の近くにもた引越してしまえばならない。

ヒロシは、この町を離れる前、中学校の時まで通っていた教会に、どうしても一回は行ってみたいとなった。それは、自分の幼い頃の思い出や、母親との思い出などがたくさんそこに宿っているからだろう。

母親に妊娠中絶を勧めた牧師が今もいるのか、もしいるとしたら、レイブで妊娠したことで悩んでいた母の相談に応じた牧師が、今はどう思っているのかも少し気になった。それで引越する前、一度日曜日の朝の礼拝に出席することにしたのだ。

すぐ次の日曜日の朝ヒロシは、約 30 年ぶりに教会に行った。決して神に対する信仰や、知り合いとの再会などを求めてではない。母親との思い出のためである。そしてそんなに期待はしていないが、もしかしたら、わだかまりというか、存在の躓きというか、自分の人生と幸せを、一瞬にして根こそぎ奪ってしまった心の傷の問題の解決を、無意識に望んでいたからかもしれない。

外から見た教会は、少し古い感じはしたが、昔とさほど変わっていない。小さい礼拝堂に入ったら、昔のままの風景が目の前に現れた。礼拝が始まる 15 分前なのに、多くの信徒が着席していた。

特に彼の目に入ったのは、いつも母親が座っていた席だった。玄関から見て、一番右側の前から 3 番目の奥の席だ。母親は、礼拝が始まる 30 分前は必ず席に座って祈っていた。まだその席には誰も座っていないので、自然にそちらに体が動いた。

周りに誰がいるのかわからないけれど、60~80 代の方が多いようだ。もしかしたら、母親と仲良くしていた同年代の方々や、自分を教えた教会学校の先生たちもいるかもしれない。

ヒロシは、いつも自分の母親が座っていた席に座って、しばらく目をつぶった。一瞬、懐かしい母親の匂いがあるような感じがした。驚いて目を開けて周りを見たが、やはり母親はもういない。また彼は目をつぶった。

彼の意識は、いつの間にか、母親の日記を見て、衝撃を受けた中学校 3 年生のあの時に戻っていた。

夜、仕事を終え、家に帰ってきた母親に起こされて、彼は眠りから目覚めた。「食事の用意ができたから、早く食べなさい」彼は嫌な顔をして何も言わず、外に出て行ってしまった。

約 2 時間後、家に帰ってきた彼に「ご飯食べなさい」と母親は言った。「先お母さんの日記を読んだけど、ぼくのお父さんは、一体誰なの？正確に教えなさいこの家出て行ってしまおうよ」と彼はいきなり声を荒げた。驚いた母親は、鍵がかかっているタンスのほうを見て、しばらく何も言わなかった。「一体、お父さんは誰なんだって！あの話、本当かよ」と叫び、彼は泣き崩れた。母親は、何もしゃべらず台所に行って、流れる涙を拭きながら、皿洗いをした。

しばらく時間が経って、ヒロシが少し落ちついた時、母親は、ヒロシのところに戻って、次のように言った。「あなたが読んだ日記の内容は本当のことよ。あなたには本当に申し訳ないけれど、本当のことよ。昔あなたが生まれる前、ある日、悪い男たちがわたしに深い傷を与えた。その時わたしは、本当に悲しかった。しかし神様はわたしにあなたをわが子として下さった。今までわたしはあなたを本当に大切な息子だと思ってきた。これがお母さんの本当の気持ちよ。分かってくれ。」

その話を聞いて、彼は、「僕はレイブで生まれた子で、レイブした悪人の子じゃないかよ。だからそんな馬鹿な話はもう止めて。二度と聞きたくないよ」と叫んで泣いた。その日の夜、母親は自分の部屋で夜通し泣いた。そしてヒロシはその日から、母親とあまりしゃべらなくなり、もっと反抗的に変わっていった。

礼拝の始まりを知らせるオルガンの前奏曲が礼拝堂に響き渡ったので、ヒロシは、目を開けた。

## ★洗礼論

### ① アウグスティヌス (354~430)

- 北アフリカ (ヌミディア地方) のタガステに生まれる。
- 373年キケロ (Cicerone、紀元前106~43年) の『ホルテンシウス』を読み、知恵への愛 (哲学) に目覚めるようになる。
- 386年8月 (32歳)、キリスト教へ改宗する。
- 396年北アフリカのヒッポという町の司教となる。
- 特にプロティヌス (新プラトン主義) の思想から影響を受け、その思想をキリスト教の思想において批判的に総合し、新しいもの (キリスト教的なもの) として生み出した、キリスト教最大の哲学者。
- 中世から現代にいたるまで、数多くの哲学者、思想家たちに多大な影響を及ぼす。
- 著書: 『告白録』(397~400)、『三位一体』(419)、『神の国』(426) …

### ② ドナティスト派との論争 (394~412年)

- ドナティスト派 (異端) は、ローマ帝国による迫害の時代、キリストを裏切った聖職者たち (traditores) が施した洗礼は無効だと主張する。
- それに対して、アウグスティヌスは、教会の中で受け継がれてきた洗礼という sacrament は誰によっても汚されず、洗礼そのものはいつまでも完全無欠で、有効であると論駁する。

### ③ ペラギウス派との論争 (412~430年)

- ペラギウス派 (異端) の人たちは、人間の本性は原初的に善いものであるといい、原罪を否定し、人間の自由意志の完全さを強調する。そして、意志のない幼児の洗礼を否定する。
- それに対して、アウグスティヌスは、原罪を認め、人間の自由意志の不完全さを補う神の恩寵について強調する。そして、意志のない幼児の洗礼を肯定する。

### ④ まとめ:

- 三位一体の名によって施された 洗礼そのものは、いつまでも完全無欠で有効であるため、悪人 (墮落した聖職者) によって汚されることはない。
- このような洗礼を受けた人は皆一つの教会 (キリストの体) に結ばれている。
- 幼児洗礼というのは、人間の原罪と自由意志の不完全さのため自力では救いに至らないことを認め、救いを与える神の恩寵に頼る儀式である。
- 幼児が洗礼を受けて亡くなった場合、その洗礼によって救われる。

## 第2回 信仰と理性

### 4 ヒゼキヤトンネル

まもなく司会者の聖書朗読と共に、礼拝が始まった。式順にしたがって、讃美歌の合唱や代表者の祈りなどが終わり、次は牧師の説教の順番だ。牧師は、メガネをかけて、非常にやせた感じの60代の方のように見えた。ヒロシは、最初は初めて見る牧師だと思ったが、よく見たら、間違いない、自分に洗礼を受け、母親に妊娠中絶を勧めた、あの牧師であることが分かった。牧師は、旧約聖書のある箇所に出てくるユダ王国の独立運動と、王によって命じられた大規模なトンネル工事について説教をしていた。

\*\*\*\*\*

(中略) 紀元前922年頃ソロモン王が死んだ後、イスラエル王国は、二つの王国、すなわち北の**イスラエル**王国と南の**ユダ**王国に分裂します。今日は特に紀元前約700年頃のユダ王国のヒゼキヤ王の独立運動と、彼の命令によって行われた大規模なトンネル工事の話をご紹介します。この話を通して、一つの問題解決における現実的側面と理想的側面について、一緒に考えてみたいと思います。紀元前約700年頃のアッシリアは、現在のイランの領土を中心にその勢力を拡張していった帝国ですが、当時のイスラエルの歴史は、このアッシリアとの関わりを知ることで、より正しく理解することができます。

紀元前745年、アッシリアの王としてティグラト・ピレセル三世が即位します。彼は、古代オリエント (今日の**中東**) を統一させ、巨大な帝国を建設することによって、新アッシリアの最盛期をもたらします。当時地中海とヨルダン川の間とその周辺を含むパレスチナ地域と、その北に位置するシリアは、珍しい木材や鉱物などが豊富で、地中海の海岸線を通して貿易も活発に行われているところでした。そしてパレスチナを通してはエジプトに、シリアを通してトルコに進出することができたので、地理的にもとてもメリットがありました。したがってアッシリア王にとって、シリアとパレスチナを属国にすることは、帝国建設に必須条件でした。紀元前738年以降、彼は、北のイスラエル王国と南のユダ王国にも貢納させます。その後、紀元前729年には**バビロニア**をアッシリア領土に編入し、紀元前727年死ぬまで、遠征を通して、**シリア**と**パレスチナ**全域をほとんど掌握するに至るのです。

一方、アッシリアの領土拡張にしたがって、幾つかの属国が度々反乱を起こしました。北のイスラエル王国も反アッシリア活動によって、紀元前722年から721年までアッシリアの侵攻を受けて完全に滅亡され、アッシリアに併合されてしまいます。ユダ王国は、何とかそのまま属国として残っていました。しかし反アッシリア活動は、決して消えることはありませんでした。紀元前713年、サルゴン二世がアッシリアの王だった時、ペリシテ族の一つであるアシュドドの王が、反アッシリア蜂起を起こします。その時、**ユダ**王国も幾つかの王国とともに、その蜂起に加担し、エジプト王の救援を確保しようとする。ところが、エジプト王の裏切りによってその蜂起は失敗に終わります。南ユダ王国はまた貢納をすることによってなんとか危機を免れるようになります。

古代オリエントにおいて、ある王国が政治的にほかの王国に隷属することは何を意味したかという、定期的に貢納するほか、その王国の公式宗教を受け入れなければならない、その王国の神を拝まなければならないということでした。具体的に言えば、イスラエルの神、**ヤーウェ**の神殿 (聖所) にアッシリアの神、アシュルの偶像を置いて、崇拝せざるを得なかったということです。それはイスラエルの神、ヤーウェを唯一の神と信じていた当時のユダ王国の信仰深い人々には、耐えられない屈辱でした。ユダ王国のヒゼキヤ王にとっても、異邦人に服従し、異邦人の神々を拝むこ

とは、大きな恥辱でした。ユダ王国は、先王の時代のように、しばらくアッシリアの属国として、貢納をし、アッシリアの神を拝みます。しかし、ヒゼキヤ王は王国の独立を目指して、ヤーウェ宗教を押し進めることを固く決心するのでした。

ところで紀元前705年、このアッシリアのサルゴン二世が死んだ時、また反アッシリア蜂起が大規模に起きました。当時、このユダ王国を含む、パレスチナの南の幾つかの王国も、アッシリアの支配から逃れようとしませんでした。特にユダ王国のヒゼキヤ王は、独立を目指すチャンスが来たと思ひ、非常に積極的でした。ヒゼキヤの父、アハス王は、アッシリアに服従したのに、彼は、アッシリアへの貢納を中断し、アッシリアの新しい王センナケリブに対する隷属関係を廃棄し、アッシリアの宗教も全面的に廃止します。そうすることによって、独立した王国となり、イスラエルの伝統的なヤーウェ宗教を建て直し、イスラエルの神、ヤーウェにだけ祭事を行おうとしたのです。

ヒゼキヤ王の**反アッシリア活動**には、ペリシテ、エジプト、バビロニアなどの周辺国も同調し、協力しました。それらの王国も、反アッシリア連合を形成することによって、アッシリアの宗主権を拒否し、それを実現しようとしたからです。アッシリアの新しい王、センナケリブが、以前の秩序を取り戻すために、シリアとパレスチナ遠征に着手したのは、紀元前701年です。彼の遠征には、エジプト軍の抵抗もありましたが、それを打ち負かし、迅速にシリアとパレスチナに侵攻し、次々と反乱した王国を降伏させます。そして反乱の主導者たちを処刑したり、流刑したりしました。

いよいよアッシリア軍は、南のユダ王国にまで攻め込んできたのです。ユダ王国の46箇所の要塞化された町は、徹底的に抵抗します。ヒゼキヤ王時代のエルサレム城壁の厚さが7メートルにも及んだことが発掘を通して推定されていますが、これを通して、当時ヒゼキヤ王とユダの人たちの抵抗がどれだけ強かったのかを垣間見ることができそうです。ところが、すべての抵抗は失敗に終わってしまいました。ユダ王国の町の一つであるラキシュは、考古学者たちによって発掘されましたが、約1500人分の遺骸が多くのごみと共に一つの洞窟の中に捨てられたことが明らかになりました。その遺跡は当時の抵抗の結果がどれだけ悲惨だったかを物語っています。絶望的な状況を見て、結局ヒゼキヤ王は、アッシリア王に使者を送り、降伏します。その降伏の条件は厳しいものでした。ユダ王国の相当の領土が、周辺の幾つかの王国に分配されてしまったからです。そしてヤーウェの神殿と王室のすべての金銀まで貢納をしないといけなほど課せられました。それだけではなく、ヒゼキヤ王は自分の数人の娘をアッシリア王の側室として送らなければなりません。

その後紀元前688年頃、アッシリア王は、再びユダ王国のヒゼキヤ王の反乱により、ユダ王国を攻めますが、ユダ王国の要請を受け入れたエジプト軍の支援と、聖書の記録のように、ちょうどその時流行った伝染病でアッシリア軍18万5千人が死んでしまったことによって、奇跡的にもその危機を逃れることができるようになりました。しかしその喜びは長く続きません。アッシリアのユダ王国への一次侵略があった紀元前701年からアッシリアが滅びるまで70~80年の間、ユダ王国はアッシリアに隷属し続けるのです。

実は、紀元前701年、アッシリア軍の侵略に備えて、短い時間の間、ヒゼキヤ王は一つの大工事を命じます。それは、アッシリアの攻めが本格的になる前に、エルサレム城内の人たちが飲み、敵には水の供給ができないように、城外にあるギホン池の水を、エルサレム丘の下を通して城内へ引くように、水路を作る工事でした。その水路はヒゼキヤトンネルと呼ばれています。ヒゼキヤトンネルは地下約50メートル下にあり、総距離は約533メートルの曲がりくねった地下水路です。しかも岩盤を掘る大変な作業でした。短期間でこれぐらいの大規模な工事を終えることは、大変なことだったでしょう。このトンネルの工事に臨んでいた作業員たちは、両側から掘り進んでいって、トンネルの中間地点でばったり会ったという記録がトンネルの中の碑文に記されています。こうして、ギホン池からヒゼキヤトンネルを通して流れる水がたどり着く場所は、エルサレム城内のシロアムという貯水池です。今もその遺跡がエルサレムにあり、多くの観光客が訪れています。教会に通っている方々は、よくご存知のように、イエス様はご自分の唾で土をこねて、それを生まれつき目の見えないある人の目に塗って、シロアムで目を洗うように指示されます。そして指示通りにヒゼキヤトンネルを通して流れてきた水で目を洗ったら見えるようになります。(中略)

皆さん、私は、ヒゼキヤトンネルの工事は、イスラエルの神、ヤーウェへの**信仰**と王国の**独立**のため、アッシリアに激しく抵抗した一つの象徴だと思います。しかし、今日少し考えたいことは、信仰と王国の独立という理想のため、ヒゼキヤ王が反アッシリア活動をし、結果的にユダ王国の多くの人々を犠牲にしたが、果たしてそれがよかったかどうかということです。本当にイスラエルの神、ヤーウェを愛する信仰深い人たちが、王国の独立を自分の命より愛する人々にとっては、決死抗戦は美しく正しいことでしょうか。ところがすべての人がそのような信念と思いをもっていたとは言いきれません。おそらく戦争が嫌いな人たちが、命を落とすたくない人たちが、国より自分の家族を養い、守ることに精一杯だった人たちにとっては、ユダ王国の反アッシリア活動は、大きな負担だったでしょう。彼らは、自分たちの神を正しく信じ、独立した王国になることを当然求めていたでしょうけれども、抵抗よりも、現状維持と安定をもっと求めたいようかもしれません。結局、信仰もしくは独立という理想的な目的を実現しようとしたため、アキシュ町をはじめ多くの町からたくさん犠牲者が出たのです。見方によっては、ヒゼキヤトンネルは、多くの犠牲者を出した無謀な抵抗の象徴に過ぎないかもしれません。このような見方もありうるのではないのでしょうか？ 要するに、ヒゼキヤトンネルというアッシリアに対する抵抗の象徴には、二つの側面があります。一つは、理想的な側面です。もう一つは現実的な側面です。理想的な側面とは、ヤーウェへの信仰と王国の独立のため、どんな犠牲を払っても戦い続ける、暗く固い現実の岩盤を掘り続けるということです。それに対して現実的な側面とは、信仰や王国の独立などの理想的目標を決して無視しませんが、理想的な目標

実現のため、個人々を不幸に導くことに抵抗し、命の大切さや生活の安定に重きを置くということです。もしヒゼキヤ王が、信仰や王国の独立に対する強い思いを抑えて、もう少し我慢していたなら、多くの人が助かったでしょう。アッシリアに隷属することは屈辱であっても少し我慢したなら、多くの人が犠牲にされないで済んだのではないかと思う人たちもきっといるでしょう。この二つの側面は、解決し難い問題に直面した際、コインの表と裏のように、いつも共存するもので、そのどちらも尊重されることはとても大切なことだと思います。理想的な側面を選んで、岩盤のような現実の問題を掘るように戦い続けるか、それとも安定という現実的な側面を選んで、妥協したり、諦めたりするかは、人それぞれの立場によって違ってくるかもしれません。

ヒゼキヤのトンネルは、このように、理想的な側面と現実的な側面から評価されると思います。つまりアッシリアに対抗するため、掘り続ける価値があるという側面と、多くの人を犠牲にしてまで掘り続ける価値はないという側面から批判的に捉えられるということです。もちろん聖書は、理想的な側面を選んだヒゼキヤ王を評価しています。そして、私、そのような理想的な側面を選ぶことによって、シロアム池で目が見えない人がイエス様に出会って見えるようになったあの奇跡のような出来事につながる場合もあると信じております。しかし、場合によっては、私たちがやむを得ず現実的な側面を選ぶとしても、神様は理解して下さいと信じております。

あくまでもその判断は、非常に難しく、どちらが正しいとすぐ答えられないものでしょう。一つの正しい難しさに近い判断というのは、その二つの側面の重要性を知り、深く悩んだ上で、下されるものだと思います。一緒に祈りましょう。(中略) \*\*\*\*\* 説教の途中、牧師はヒロシを何度も意識して見ているように見えた。ヒロシはそれが気になったが、最後まで牧師の話に耳を傾けた。

### ★信仰 (fides) と理性 (ratio) : 『三位一体』から

- ①キリスト教の権威 (auctoritas) である聖書にはイエスキリストが紹介されている
  - ②時間の中に現れたイエスは知識に、永遠において存在するキリストは知恵に関わる。
  - ③イエスキリストは、ご自分にに関する知識については信仰を吹き入れ、知恵についてはご自分 (真理) を啓示する。
  - ④ここで信仰を伴う知識は実践的知識 (activa scientia) と呼ばれ、知恵は観想的知恵 (contemplativa sapientia) と呼ばれる。
  - ⑤キリスト者は知識から知恵へ導かれるが、その際、知識に関わる信仰が、知恵に関わる理性を清める。
  - ⑥清められた理性は不変の知恵に対する認識 (理解) する。
  - ⑦要するに、聖書 (権威) からイエス ((人間になった知恵)) に関する知識を得、その知識によって信じるようになる。さらに、理性の目は、信仰によって清められて、キリスト (天上の知恵) を見る (認識する) ようになるのである。
  - ⑧信仰と理性の関係は次の二つの命題から垣間見ることができる。
    - a 「知るために信ぜよ」 (crede, ut intellegas) : 探求の根本命題
    - b 「信じるために知解せよ」 (intellege ut credas) : 探究の逆命題。
- Sermones 43,9  
「信じるために知解せよ」
- ⑨根本命題と逆命題をつなげると次のようになる
    - a 逆命題 (知→信) →根本命題 (信→知)
    - b 知 (聖書の知識) → 信 → 知 (観想によって見る知恵、真理)
  - ⑩「知→信→知」という図式は、「内なる自己への還帰」と「神への超越」という神探究の構造として現れる。

## 第3回 自己存在の否定性と肯定性

### 5 理想と現実

礼拝が終わりと、ヒロシはそのまま家に帰ろうとして、玄関を出た。その時、後ろから声をかけられた。

「すみません。」振り向いてみたら、牧師であった。「ヒロシさんですよね。」「はい。」「本当に久しぶりですね。あなたは小さい頃からお母さまと一緒にこの教会に来ていましたよね。わたしのことも覚えていませんか?」「はい。」「もしよかったです、少しだけ、牧師室でお茶でも飲んでいきませんか?」「はい、わかりました。」

ヒロシも心のどこかで、この牧師と話してみたいと思っていた。だから、牧師に声をかけられた時、素直に応じたのだ。

牧師室で牧師と対面してみたら、礼拝堂で見たより、もっとやせこけ、顔には深い疲れの陰がかかっていた。

牧師「お母さまのお葬式の時にお会いして以来初めてですよ。もう20年以上も経ちましたね。」

ヒロシ「そうですね。」

牧師「あれから、どう過ごしていましたか?」

ヒロシ「何とか大学を卒業し、その後、会社に入って…まあ、いろいろありました。」

牧師「そうですね。お住まいは?」

ヒロシ「ここからそんなに遠くないところですが、来月から新しい仕事のため、また引越しなければなりません。」

牧師「この町にずっと住んでいたのでしょうか?それとも…。」

ヒロシ「事情を説明すると、少し時間もかかるので…実は一年前にこの町に引越してきました。」

牧師「そうだったんですか。でもまた引越さないといけませんね。」

ヒロシ「いろいろと事情があって…。実は、この町に来る前は、数年間炭鉱の仕事をしておりまして…」

牧師「大学を卒業して炭鉱の仕事をしたということでしょうか?」

ヒロシ「いいえ、最初はある企業に勤務していましたが、上司とうまくいけなくて、それで退社してしまったんです。」

牧師「細かくいろいろ聞いてすみません。」

ヒロシ「大丈夫です。」

牧師「この町に来てもう一年経ったということは、炭鉱の仕事は止められたということですか?」

ヒロシ「はい、事故もあったので…」

牧師「もしかして一年前死者と負傷者がたくさん出たあの事故ですか?」

ヒロシ「はい。」

牧師「あなたは大丈夫でしたか?」

ヒロシ「幸いにも命は助かりましたが、数ヶ月間入院生活をせざるをえませんでした。」

牧師「それは本当に残念なことですね。」

ヒロシ「今はだいぶ元気になりました。もう大丈夫です。わたしも炭鉱を掘る作業をしていたので、今日のお説教は興味深く聞きました。ありがとうございます。」

牧師「こちらこそありがとうございます。」

ヒロシ「今日のお話の中で、解決し難い一つの問題を解決しようとする際、**理想的な側面**と**現実的な側面**があるという話は、なるほどなと思いました。」

牧師「よく聞いて下さったんですね。感謝です。」

ヒロシ「大体教会というところは、信仰など理想的な側面ばかりを強調するところだというイメージがありますが、決してそうでもないなと改めて感じました。」

牧師「理想的なことばかり強調することは、わたしも本当に好きではありません。人間味がなくなってしまうというか、それで人間的な側面、現実的な側面も看過しないように努力しています。」

その言葉を聞いて、ヒロシは理性的に理解していても、まだ感情的に解決されていない心のあの傷に触れてしまい、一瞬鋭い眼差しで牧師をにらんでみた。そして、その抉られた傷にせきたてられて、ついに牧師に自分の内側をぶつけてしまった。

ヒロシ「こんなに人間味を強調する先生が、なぜわたしの母に**妊娠中絶**を勧めたのですか?」

突然震える声でそのような質問をされて、牧師はとても驚いた顔をしたが、すぐ自分の冷静さを取り戻した。そして落ち着いた声でヒロシの目を見て話した。

牧師「もうご存知ですね。」

ヒロシ「自分がレイプで生まれたことも知っています。」

牧師「どうやって知ることになったか分かりませんが、その通りです。わたしは間違いなく、あなたのお母さまにそのように勧めました。あなたには本当に申し訳ありませんが、それも強く勧めました。」

ヒロシ「なにになぜわたしに**洗礼**を受けたのですか?生まれるべきでない者に洗礼を受け、祝福することは、偽善ではないですか?妊娠中絶を勧めたことでは、子供が生まれてはいけないと思うことで、その存在を否定することでしょう。そして幼児洗礼を受けたことは、子供の誕生を祝い、その子供の存在を肯定し、祝福することではないでしょうか。これは完全に矛盾したことであり、**偽善**だと思いますけれども…」

牧師は、彼の言葉に心が突きぬかれた。心が痛い反面、自分が自分を責めるよりヒロシに責められるほうがずっと楽に感じられた。

牧師「その通りです。完全に偽善だと思います。イエス様は地獄の話はあまり口にしない方でしたが、特に当時偽善者だった宗教指導者たちに対しては、『地獄の罰を免れることができようか?』と痛烈に批判したことがあります。わたしはイエス様の御言葉の重みもよく知っているのです、長い間自分が犯した大きな偽善に苦しんできました。今もその時のことが忘れられません。あなたのことも忘れたことはありません。」

ヒロシは、意外と率直に答えてくれた牧師の顔に、少し興奮していた心が静まるようになった。そして真剣に反省の顔をしている牧師に言った。

ヒロシ「もうわたしも大人ですし、母親のため、そのように勧めたことは、理解できます。」

牧師「そのように考えて頂いて感謝です。あなたのお母さまに妊娠中絶を勧め、その後あなたが生まれた時から、自分の勧めたことに対して、ずっと罪悪感をもっていました。ずっと引きずっていました。今もそうなので、もしかしたら、それがわたしに与えられた罰なのかもしれません。しかしまた同じような状況が来たら、わたしは同じことを勧めると思います。これがわたしに陥っているジレンマです。」

ヒロシ「先生の気持ちは何とか分かりました。なのでそんなに自責しないで下さい。」

牧師「ヒロシさん、本当にごめんなさい。」

しばらく間置いて牧師は話を続けた。

牧師「わたしが考えるには、当時あなたのお母さまにとって、子供を生むのは、**理想的**なことでした。なぜなら命を大切にすること、特に神様に愛され、祝福される子供を生むことだったためです。そして生まないことは**現実**なことでした。というのは、子供を生まないことによって、厳しい現状を少しでも避けることが出来たからです。わたしは、現実を選ぶように勧めましたが、あなたのお母さまは理想を選んだのです。」

ヒロシ「レイプで生まれたこんなわたしに対して抱いていた理想は、ただ夢のような、希望のようなものでしょう。残念ながらそれは母の思い込み

に過ぎません。」

牧師「ヒロシさん、これだけは分かってほしいです。あなたにはお母さまの選択が意味のない思い込みのように見えるかもしれませんが、あなたのお母さまは神様に愛される子供を生むというその理想にご自分の人生のすべてをかけたのです。だからお母さまの気持ちはどうか…」

ヒロシ「レイプで生まれた人間が、同時に神に愛される子になるなんて、誰が信じるのでしょうか。むしろわたしにはそれがふざけた言葉のように聞こえます。昔から母に、神様はあなたをわたしに下さったとか、よく言われたものですが、わたしはその言葉が嫌いでした。今も嫌いです。」

久しぶりの出会いなのに、突然、敏感な話題に発展したので、二人は自分たちが少し行き過ぎたことに気づいて、話題を変えようとした。しかしそれ以上話は続かなかった。

もう昼の時間だったので、ヒロシは牧師に挨拶をし、牧師室を出た。牧師は、教会の正門を出ようとしたヒロシに向かって「また来て下さい。もう少し話しましょう」と言った。ヒロシは何も言わず、黙礼をして、教会を去った。

## 6 自己存在の否定性

ヒロシは、家に戻って、昼食をした。久しぶりに教会に行き、牧師と会話をし、思わぬ話題もあって、緊張したからか、少し疲れを覚え、横になった。そしてそのまま眠りに入ってしまった。三、四時間ぐっすり寝たようだ。起きてから、家の周りを散歩した。もう外は日が暮れそうになった。ゆっくり歩きながら、ヒロシは、今日教会で牧師と交わした話を思い出した。自分の本音を牧師につげ、余計なことを言ってしまったのではないかと少し後悔した。

ヒロシは、自分が思った以上に、当時**牧師**の立場が複雑だったこと、母親のことを考えて真剣に勧めたこと、そして自分の勧めたことについて、責任感を持っていることが分かったので、彼に対する心のわだかまりが少し取れそうになった。

何より、若い頃の母親が、どんな思いで、自分を生もうとしたのかが分かったので、それもよかったと思った。でも自分のような人間を生むことと自分が不幸の始まりなのに、なぜ、自分の人生をすべて投げ捨ててまで、意味の分からない理想を追いかけていたのか…。ヒロシには、現実ではなく、理想を選んだ母親の決断は、ばかばかしいものであった。

現実を選んで、自分を生まなかったなら、ほかのいい男と出会い、幸せな家庭を築くことができたかもしれないのに、なぜ、理想に翻弄されて、自分の人生をダメにしたのか、彼にはまったく分からなかった。生まなかったら、母親も、自分も、こんな苦しい思いをしながらかんた生きててもよかったのに…。

ヒロシは、自分がどうやって生まれたかを知ってから、自分は生まれるべきではなかったという**自己存在の否定性**を、意識の深いところにまで叩き込んできた。そしてその否定性を抜き取って、明るく、幸せに生きることがもう無理だろうと考えてきたのだ。

彼は、母親に対する感謝の気持ちをまったく持っていない、そして、自分の出生の秘密を知ってから、可愛そうな母親を責め、苦しめたことを、反省さえしない冷たい人間ではない。暗い存在の否定性ゆえ、母親に優しくしてあげなかったことを、今も心痛く覚えている弱い人間だ。しかしながら、自分の意識を縛りつけている**自己存在の否定性**に負けて、母親の理想までも、否定しようとするのだ。

ヒロシは、このような自己存在の否定性について考えていた時、ふと、その矛盾に気づいた。というのは、自己存在の否定性というのは、自分が生まれるべきではなかったことを全く肯定することである。そして、自分が、自己存在の否定性を肯定し、自分の意識の中にそれを深めてきたとすれば、自分が生まれるべきでないとか誰かが考えた、主張したりする際、彼は少なくともそのことに同意するはずなのだ。しかしヒロシは、最初自分の誕生を望まなかった牧師の立場を理解しながらも、彼に対して少し恨みを覚えてきたことも否認できない。母親の現実のため、母親の幸せのため、苦悩の決断を下した彼を頭では赦しながらも、心ではまだ赦していないのだ。彼は自分の存在の否定性を肯定し、それを確かなものとしてきたのに、他人が自分の存在を否定したことが分かった時、彼はそれに同意せず、強い抵抗を覚えたのである。これが自己存在の否定性の矛盾であり、ヒロシは、それに気づいたのだ。

ヒロシは、自分が長い間、自分の意識の中で固めてきた自己存在の否定性を、自分のアイデンティティの殻とし、その殻の中に引き込み、時には歪んだ平和を保ち、時には自分を苦しめてきたのだ。いつの間にか、レイプで生まれたという事実より、その事実によって自分が作り上げた自己存在の否定性が、大きな意味を持つようになった。しかし、ヒロシは、その矛盾に気づいて、戸惑っている。そして恥ずかしくなり始めた。ヒロシは、その矛盾に気づくことによって、自分が固く守り、保ってきたその殻が、壊れそうになってつらくなったけれど、それが一体何を指しているのかが気になった。それでその矛盾について、もう少し自分の思考を働かせてみることにした。

自分が生まれるべきでなかったことを自分が肯定することと、自分の母親が自分が生んだことを自分が喜ばないこととは、矛盾しない。この場合は、自分が自分の誕生を本当に喜ばないことを意味する。

それに対して、自分が生まれるべきではなかったと思えば、その考え方を肯定することと、牧師が彼の誕生を勧めなかったことに自分が喜ばず、怒りを覚えていることとは、明らかに矛盾である。この場合においては、自分が自分の生まれを本当に喜ばないかどうかは、分からない。なぜなら、本当に自分の生まれを嫌うなら、他人がそのようなことを言っても嫌な感情は生じないからである。嫌な感情が生じるということは、自分が自分の存在 100%嫌うことではないということとを意味する。100%嫌わないということは、わずかでも自分が自分の存在を肯定しているということになる。そして、わずかでも自分の存在を肯定するというのは、理想を選んだ母親の行為を、心のどこかでわずかでも肯定することであり、現実を選ばなかった母親の行為を、心のどこかでわずかでも肯定することである。このような熟考の結果にヒロシは非常に戸惑い、それを全的に否認したくなった。そしてもう何も考えなくなかった。散歩を終え、家に戻ったヒロシは、自分の内面において自己存在の否定性がほとんど占めている一方、**自己存在の肯定性**もほんのわずかに潜んでいることが何を意味するのかに気がなり始めた。ヒロシは、次の日曜日に、教会でそのことについて牧師と議論できたらと思った。

## ★本文のまとめ：ヒロシの自己存在の否定性と自己存在の肯定論

- ①レイプで生まれたこと＝生まれるべきでないこと＝自分の誕生を喜ばない＝自己存在の否定
- ②他人が妊娠中絶を勧めたこと＝生まれるべきではないこと＝ヒロシは怒りを覚える＝100%の自己存在の否定ではない

- ③100%の自己存在の否定ではない＝ほんのわずか自己存在を肯定する
- ④ほんのわずか自己存在を肯定する＝幸福への欲求が少しある
- >生きる＝存在する＝ただ生きるのではなく、幸せに生きる
- >幸福に絶望すると自己存在の否定性につながる
- >幸福を求めると自己存在の肯定性につながる

## ★幸福論（自己存在の肯定性）：『三位一体』を中心に

- ①何かを知らなければ、その何かを愛することはできない。
- ②人間は幸福を知らなければ、それを愛することはできない。
- ③言い換えれば、人間は誰しも「幸福」を愛している。それは幸福を知っていることを意味する。
- ④知っているというのは、先天的に記憶していることである。  
(アプリアリ a priori ← アポステリアリ a posteriori)
- ⑤この幸福への愛は、自己存在の肯定性に関わり、この幸福への絶望は自己存在の否定性につながる。
- ⑥幸福が成り立つためには二つの条件が必要である。一つは欲するものを所有することであり、他の一つは悪しく欲することをしないことである。前者においては不死が、後者においては良き意志が最も必要である。
- ⑦要するに、究極的な幸福とは永遠に善く生きることと関わる。
- ⑧永遠に善く生きる幸福は、神との関わりから来る。
- ⑨神との関わりはイエスキリストを通して可能である。
- ⑩幸福な生活は、神（キリスト＝真理、知恵）を求め、喜ぶことである。  
(幸福の生：知解することによる喜びの生＝「天の天」の生)  
「幸福な生活とはあなたを求めて、あなたによって、あなたのために喜ぶことである。」『告白録』10.22.42  
「じっさい幸福な生活は真理を喜ぶことなのである。そしてこの喜びは、神よ、「真理であり」「私の光であり」「私の顔の救いであり、私の神」であるあなたに対する喜びである。」『告白録』10.23.33

## 第4回 自由意志と悪の根源

### 7 悪の根源

#### ①

一週間があっという間に過ぎた。日曜日の朝から雨がぼつぼつと降ってきた。天気の良いのか、教会に行くか行くまいか、少し迷った。でも、引越しの準備などを考えると、おそらく教会に行けるのは今日だけで、牧師に少し聞きたいこともあって、もう一度行くことにした。先週と同じように、ヒロシは母親がよく座っていたあの席に自然と体が動いた。着席したヒロシは、うつろな目で、正面を凝視し、しばらく空しい思いにふけた。

#### ②

「理想を追いかけていた母は、毎週この席に座るたびに、自分の子供が神に愛され、祝福されるように祈っていただろう。いつも真剣に長く祈っていたのは、間違いなくそのためだろう。しかし俺が長年自己存在の否定性をもって、こんなに苦しく生きてきたことを、もしあの時の母が知っていたなら、きっと俺を生もうとしなかつただろう。牧師の助言にしたがって、現実を選んだかも。だから、理想にすべてをかけた母の選択は失敗なのだ。今の俺の生き方がそれを証明しているのではないか。俺も可愛そうだけど、母も本当に可愛そうだな。」

#### ③

オルガンの演奏と共に礼拝が始まった。礼拝の開始時、ヒロシは、**①自己存在の否定性**を貫いて生きてきた自分の意識のどこかに、**②自己存在の肯定性**も少しあるということについて、思いを巡らしていた。そのため、礼拝に集中できず、牧師の説教もほとんど耳に入らなかった。講壇に立った牧師の顔が先週よりも痩せてしんどそうに見えたので、その印象だけが残った。

礼拝後、先週のように、牧師は、声をかけてきた。

牧師「ヒロシさん、お時間大丈夫でしょうか？」

ヒロシ「はい。」

ヒロシも、少し聞きたいことがあったので、牧師室について行った。

牧師「今日も礼拝に来て頂いてありがとうございます。」

ヒロシ「いいえ。」

牧師「先週は短い時間でしたが、有意義な話がありました。そして心の中に気になっていたことを正直に言って下さったことも、本当に良かったと思っております。」

ヒロシ「そういうことを言うために、ここに来たわけじゃなくて…。まあ、話の流れが途中変わったので、自分の感情が抑えられず、そうになってしまいました。特に反省はしていませんが、先生に失礼だったなら、ご理解下さい。すみません。」

牧師「こちらこそ、すみません。」

近くから見たら、牧師は本当にやせかけて病気のように見えた。気になってヒロシはそのことについて聞いてみた。

ヒロシ「どこか調子が悪いですか？先週もお顔色がよくなかつたようでした。」

牧師「ええ、少し…。でも大丈夫です。いつ死んでもいいと思って生きていますから、心は楽です。ご心配かけてすみません。これくらいの会話なら全然問題ありません。」

ヒロシ「今日無理しなくてもいいです。」

牧師「いいえ、本当に大丈夫です。」

ヒロシ「もうすぐ仕事が始まるので、この教会に来るのは、今日が最後です。」

牧師「そうですか。どこに行っても、元気で頑張ってください。」

ヒロシ「はい、ありがとうございます。」

牧師「もし今日が最後の日であれば、もうあなたに会うことはないかもしれませんね。」

ヒロシ「わたしのような人間に会わなくてもいいでしょう。」

牧師「わたしに対して、そしてあなたのお母さまに対してあなたの思いがどうなのかは、先週の話を通してよく分かりました。でも、今日が最後の

日ということですが、お気に入りではないでしょうけれども、お母さまの真実な思いは忘れないで下さい。」

ヒロシ「先生、わたし自身は、母の⑨理想のように、神に愛される存在ではありません。あなたが勧めた⑩現実のように、生まれるべきではない、価値のない存在だといつも考えております。」

牧師「ヒロシさん、すみません。」

ヒロシ「もう終わったことなので、こちらこそ何度もすみません。」

牧師「本当にあの時はすみませんでした。」

④

ヒロシはまたこんな話になってうさん臭かったが、先週の礼拝後、家に帰って気づいた、自己存在の否定性の矛盾について、牧師に聞いてみようかと思った。

ヒロシ「先週先生との話が終わった後、自分を戸惑わせることがありまして…。自分は100%生まれるべきでなかったと思って生きてきたのに、よく考えてみたら、ほんのわずかはその反対の感情を持ってきたことに気づきました。自分はレイブで生まれたため、生まれる価値がないと思ってきた一方、あなたが母に妊娠中絶を勧めたことを非常に不快に思い、あなたを恨んできました。もし自分の出生を完全に喜ばなければ、あなたの勧めに同意し、不快に思う必要がないのに、自分はそうじゃないのです。それは自分の意識の中に、生まれるべきでなかったという自己存在の否定性もあれば、⑤自己存在の肯定性も少しはあるということでしょうか？厚かましいですが、今日このことについて先生のご意見を最後に聞かせて下さい。」

牧師「自己存在の否定性を完全に肯定しようとしてきたのに、自己存在の肯定性も完全に否定できないということですか？分かりやすく言えば、ご自分のことが本当に嫌いなのに、知ってみれば完全には嫌いではないということでしょうか？」

ヒロシ「はい、そんな感じです。」

牧師「あなたは、非常に正直で客観的な方ですね。ふつう、あなたのような深い心の傷をもっている方は、偏りやすいですが、少なくとも先週と今日の話からすると、あなたにはそんなことがないですね。」

ヒロシ「先生は、わたしのことを知らないから、そう言うでしょうけれども、わたしは本当に心が歪んでいる人間です。何をおっしゃいますか？」

牧師「わたしが見たら、他の人よりストレートですが、まっすぐで偽りのない方ですよ。この世の中には、見た目は優しく、言葉遣いはきれいで、非常に礼儀正しいですが、内面はそうではない人もたくさんいます。」

⑤

ヒロシ「そんな話を聞きたいわけじゃないですから、もう止めて下さい。」

牧師「分かりました。先ほどご質問されたことについて話しましょう。まず自己存在の否定性についてですが。」

ヒロシ「どうぞ。」

牧師「ヒロシさんにとって、自己存在の否定性の根源は何だと思えますか？自分が生まれるべきでなかったと思う本当の理由は何かということですか？」

ヒロシ「うん、正直に言いますと、レイブで生まれたことですかね。」

牧師「⑥レイブという犯罪が自己存在の否定性の根源だということでしょうか？」

ヒロシ「はい。」

牧師「では、レイブという犯罪そのものとレイブした人、その中で、どちらの方がその根源により近いと思えますか？」

ヒロシ「それはレイブした人ではないでしょうか？」

牧師「すると、その⑦犯罪を犯した人が、あなたにおける自己存在の否定性の根源と言えるのでしょうか？」

ヒロシ「そうかもしれません。」

牧師「もしそうだとすれば、犯罪を犯したその人が自己存在の否定性の根源であり、悪の根源になるのでしょうか？」

ヒロシ「そうだと思います。」

牧師「わたしの推測ですが、悪の根源であるその人の⑧血と遺伝子を、あなたがご自分の中に受け継いでいると思ってきたため、あなたは生まれるべきではなかったという自己存在の否定性を100%肯定しようとするわけですね？」

ヒロシ「そうです。全くその通りです。」

牧師「すると、これはどう思えますか？つまり、犯罪を犯した人の血とDNAも、それを受けたあなたの血とDNAも、悪だと思いますか？」

ヒロシ「そこまでじゃないのですが、とにかくその両方の血とDNAは、その悪によって汚れているものだと思います。」

牧師「それはその両方の血とDNAそのものが悪ではないということですか？」

ヒロシ「悪そのものではないけれど、他の人たちも思っているように、とにかく忌み嫌われるものに違いありません。」

牧師「この世の中において、偏見をもって見られることは明らかですが、あなたも思っているように、悪そのものとは言えませんね。」

ヒロシ「うん、確かに悪そのものとは言えないですけども…。その罪を犯した人が悪人であると言えるなら、悪の根源はその人の外ではなく、内にあることになるでしょう。だからそういう意味で⑨血とDNAが悪の根源のようなものではないでしょうか？」

⑥

ヒロシの話聞いて牧師は、しばらく間を置いた。そして何かを思い出したかのように、話を続けた。

牧師「この前、新聞でアメリカのある死刑囚の話を読んだことがあります。彼は処刑される前に、自分の罪を深く反省し、それを償う一環として、自分の⑩臓器をすべて寄贈したいと申し出て、刑務所当局はそれが適当なのかどうかを審議するという記事でした。もしあの死刑囚の臓器寄贈の許可が得られて、実施されることになるなら、その際、彼の血とDNAは悪に汚れたものなので、断るべきでしょうか？どうでしょうか？」

ヒロシ「それは…難しいですね。何とも言えません。」

牧師「おそらく客観的に考えると、犯罪者の血とDNAを含む臓器は、普通の人たちには好ましいものでないかもしれませんが、それを切に必要とする患者さんたちの立場から考えると、悪そのもの、もしくは悪に汚れたものと見なすのは適切ではないでしょう。」

ヒロシ「すると、何が⑪悪の根源と言えるのでしょうか？心でしょうか？」

牧師「心です。特に心の中の意志、正確に言って、どんな意志かという、⑫悪しき意志ですね。この悪しき意志が悪の根源です。」

ヒロシ「悪しき意志は変わるものではないでしょうか？いつか心も変わって、意志も良く変わったら、悪の根源は消えてしまうのではないのでしょうか？」

牧師「すばらしい質問ですね。それがわたしたちを戸惑わせる問題だと思います。ただしはっきり言えることは、悪人は自分の悪しき意志によって犯したその悪に対しては、必ず責任を持たなければならないということです。ここでわたしが言いたいことは、悪人の血と遺伝子は、悪に汚れているもの、不快なもののように見えるかもしれませんが、決して悪の根源ではなく、悪によって汚れたものでもないということです。体は体、心は心なので、悪から、ある悪人の血と遺伝子を受け継いだから、自分の存在も悪で、汚れたと思うのは、間違いだと思います。血と遺伝子は、⑬個性を受け継がせるものであって、⑭善悪の問題を受け継がせるものではないということです。」

⑦

ヒロシ「わたしが教会学校に通っていた時、最初の人間である⑮アダム」の罪が、すべての人に⑯原罪として受け継がれていると学びました。未だにはっきり覚えてます。もしそうであるなら、親の罪と悪はその子供に、その子供の罪と悪はその子供の子供に受け継がれることになります。自分が自分のことを嫌いになった理由には、その教えの影響もあります。」

牧師「確かにキリスト教において、最初の人間の罪が、原罪としてすべての人に自然に受け継がれるという教理があります。あなたの話からすると、後世の人であればあるほど、教え切れぬ先祖たちのたくさんの罪や悪を受け継がれることになります。最初の人間が最も大きな責任をもっているのに、最後の人間が一番罪と悪に満ちている者になってしまいます。こんなことは考えられないですね。⑰罪と悪は血と遺伝子を通して次の世代に受け継がれるものではありません。もちろん、キリスト教においては、最初の人間の罪によって、神を認識する内的目を失い、神から離れて五感中心の人生を生きるようになったという⑱存在の傷が、すべての人の内側に生じるようになったと信じられています。その存在の傷を罪として解する人たちがいます。誰かが神の臨在において存在の傷を自分の深い罪として認識するという一種の霊的体験をするなら、その経験はその人に意味があるでしょう。しかしキリスト教の信仰を知らない人に、存在の傷を罪といい、その罪はすべての人に遺伝的に受け継がれるというなら、誤解と抵抗を招きかねないのではないかと思います。もちろんこの存在の傷によって、悪と墮落が生み出されやすくなる恐れがあります。しかし、わたしはこの存在の傷を、犯罪の概念ではなく、深い傷として見る時初めて、そしてその傷を持っているすべての人を⑲傷つけられた者として見る時初めて、キリスト教の十字架の意味と、十字架を通して現れた神の愛の意味がよりはっきり伝わるのではないかと思います。そしてキリスト教は本当の愛の宗教が変わっていくと信じます。だから母のお腹の中で死んだ子や、幼い頃亡くなった子供や、善悪の認識のないまっすぐな知的障害者などをひくくする、すべての人間は原罪を受け継いだ罪人だと規定することは信仰をもっている人にとっても持っていない人にとっても、いろいろと誤解を招くので、注意すべきでしょう。決して親の悪が血とDNAを通してその子供に遺伝されるということではありません。親の悪によってその子供が傷つけられてしまうというふうにして、最初の人間の罪の結果として、すべての人が傷つけられて、罪と悪にも陥りやすくなってしまったというふう理解するのが妥当だと思います。話が少し的を外れてしまってますみません。」

⑧

牧師「だんだん話が難しくなってきましたが、わたし個人としては、天使はもちろん、悪魔も存在すると信じております。悪魔と天使の根本的な違いは、善き道を選ぶことも、悪しき道を選ぶこともできる自由なる意志の違いだと思います。言い換えれば、天使はいい意志を持ち続け、悪魔は悪しき意志を持ち続けること、それが天使と悪魔を分ける分かれ道なのです。」

ヒロシ「教会学校で何度も聞いていた聖書の話ですが、蛇として現れた悪魔が、エデンの園で幸せに生きていたアダムとその妻エバを誘惑し、二人はその誘惑に負けて、禁断の実を採って食べてしまったでしょう。この聖書の話を通して、小さい時のわたしの意識の中には、悪を行う人間も悪いですが、悪へ誘惑する悪魔の方がより大きな悪であり、その責任もより大きいという認識が叩き込まれていました。そのため悪魔を退けなければならないという変なこともです。今はもう神も信じられず、悪魔の存在なんてどうでもいいと思いますが、レイブで生まれたわたしがある悪人の血と遺伝子を受け継いでいるということと共に、悪魔の仕業によって自分のような人間が生まれたかもしれないという認識も、自己存在の否定性の根幹をなしていることも否定できません。なぜわたしがこんな話をするかご理解できるでしょうか？」

牧師「もちろんです。自分の存在の根源を、⑳悪人にも、㉑悪魔にも関連づける、それで自分の存在を否定するということですね。それもキリスト教の教えの影響で…。本当にキリスト教は、こういう問題について、深く考え、反省すべきところは反省し、改善すべきところは改善しなければなりません。実はキリスト者たちの中では、自分の罪と悪の原因として自分の欲や間違いを認めながらも、それと同時に悪魔の誘惑と責任のせいによって、そのような罪と悪につながると信じる人も結構います。彼らは、自分の欲と戦い、誘惑する悪魔とも戦っています。だから、神による喜び、

平和、自由などを常々口にしながらも、実際は自分の欲と悪魔との苦しい戦いに多くの時間を費やしているのです。面白いでしょう。そのことに関しては何も言いたくないことが山ほどありますが、時間が無いので…。ただわたしが言いたくないことは、悪の根源は、悪を行う存在の**②悪しき意志**であり、その意志は、血と遺伝子に悪の種のようなものを受け継がせることは全くないということです。先ほど申し上げましたように、悪の結果、罪の結果として、精神的な面においても、環境の面においても、何か悪い影響が及ぶことはあるでしょう。話が長くなって申し訳ありませんが、あなたは、悪を行ったある犯罪者と、その犯罪者を誘惑した悪魔を自分の存在の根源に関連づけようとしていること、そしてそのような認識が大きくなるにつれて、あなたの内面にある淵のような存在の傷ももっと深く抉られつつあることはよく理解できました。」

ヒロシ「先生の言うことを素直に受け入れることは難しいですが、一理はあるかなと思います。もう自分の存在の否定性について話すのは止めよう。」

### ★本文のまとめ：悪の根源

- ①悪人の血・DNAは**悪の根源**にならない。
- ②悪人の**悪しき意志**が悪の根源である。
- ③悪しき意志を誘発するものは**存在の傷**である。
- ④存在の傷とは、**原罪**と呼ばれるものとして、最初の人間の悪によって、神を認識する内的目を失い、神から離れて五感中心の人生を生きるようになった状態である。

### ★自由意志と悪の根源：『自由意志』から

- ①神が善なら、なぜ神から出た人間は悪を行うのか？
- ②魂にとって存在する＝生きていること＝知り理解すること（＝幸福）
- ③神（最高の善・理性）を知解することは究極的な幸福である。
- ④神（最高の善・理性）を知解するのは人間の理性である。
- ⑤神は理性をもっている人間に次のように秩序を命じる。  
（神（最高の善）>理性（中間的善）>感覚的なもの（下位の善））
- ⑥しかし人間は悪にも善にも転ぶ自由意志をもっているため、それを拒否することができる。
- ⑦善き意志は、自分の理性を神（最高の善）に服従させることで、悪しき意志は、自分の理性を感覚（肉欲）に服従させることである。
- ⑧悪にも善にも転ぶ自由意志がなければ、善は善にならず、悪（罪）は悪にならない。（正しく生きるも悪しく生きるも自由意志が必要）
- ⑨悪を選ぶ悪しき意志こそが悪の根源になる。
- ⑩したがって、善は神から出ても、悪は人間の悪しき意志から出る。
- ⑪自由意志の犯した罪（原罪）によって、われわれは可死的な者、無知の者、肉の奴隷として生まれた。つまり人間の自然本性に可死性（mortalitas）、無知（ignorantia）、困難（difficultas）という三つの罰が与えられたのである。

## 第5回 時間論と神の似像

### 8 善の根源

- ①話の途中、牧師は調子ももっと悪くなったからか、すぐ戻ってくるという、牧師室を出た。そして約5分後、帰ってきた。牧師「長くお待ちさせて本当にすみません。」ヒロシ「いいえ。大丈夫ですか？今日調子が悪かったら、お話はこれくらいで十分です。」牧師「せっかくですし、これからまた会うこともないかもしれないので、もう少し話しましょう。」牧師の力のない声を聞いて、ヒロシは、牧師が何か重い病気で患っているのではないかと思い始めた。
- ②牧師「ヒロシさんは、正直にも、ご自分の出生の問題で、自己存在の否定性を完全に貫いて生きてきたというふうにおっしゃったんですね。」ヒロシ「ええ。」牧師「自己存在の否定性は、自分を記憶し、自己を把握し、自分を愛してからの生じる問題だと思います。この**①自己記憶**、**②自己把握**、**③自己愛**の中で、一つでも欠けていたら、自己存在を否定することはできません。よく考えてみると、自己存在を否定する理由は、自己を記憶し、自己を把握し、自己を愛するからです。たとえばレイブで生まれたという**④記憶**が無ければ、自己存在を否定することができません。その記憶があるとしても、レイブで生まれたことの意味が**⑤把握**できなければ、同じく自己存在を否定することができません。レイブで生まれたことを記憶し、そのことの重大さを把握しているとしても、自己を愛することが無ければ、やはり自己を否定する理由が全くありません。」ヒロシ「この話は納得できます。おっしゃるとおりです。レイブで生まれた自分を記憶しているから、その自分がどれだけ悲惨なのかをよく把握しているから、自分を少しは愛しているから、自分の存在を嫌い、否定することです。理解できます。でもこんなことが分かったところで何の意味があるのでしょうか？」牧師「今までの自己を記憶すること、精神を集中して自己を把握すること、自己を愛することは、元々自己が自己であるように支える人間存在の三つの要素です。そしてこの三つの要素は、一つも欠けては自己が自己として成立しなくなります。したがって、自己記憶、自己把握、自己愛という三つの要素は、人間の精神において**⑥三位一体**をなしていると言えます。」
- ③ヒロシ「だからそれがわたしに何の意味があるのかということですか？」牧師「もう少しこのことについて言わせて下さい。なぜ自己存在の否定性の話の中で、わたしが自己記憶、自己把握、自己愛という**⑦精神の三一性**について語るかは、後でその意味が分かるでしょう。」ヒロシ「じゃ、どうぞ。」牧師「先ほど、今までの自己を記憶し、把握し、愛することが、自己が自

- 己であるように支える精神の三つの要素だと言いました。実はこの三つの要素は、**⑧時間**とも、非常に密接な関係があります。」
- ヒロシ「難しい話なら、そんなに聞きたくありません。」
- 牧師「すみません。そんなに難しい話ではないので、もう少し辛抱して下さい。時間は何だと思いませんか？」
- ヒロシ「そんな難しいことは考えたことはありません。」
- 牧師「確かに時間に定義するのは難しいです。時計の動きや、地球の自転を含む天体の動きなど、様々な答えが出されるでしょう。分かりやすく言えば、時間は過去と現在と未来で構成されている何かとして定義できるでしょう。」
- ヒロシ「まあ、その定義にはわたしも同意します。」
- 牧師「過去、現在、未来は、今存在するかしないかという観点から見ると、**⑨過去**はもう存在しない時間で、**⑩未来**はまだ存在しない時間です。そして**⑪現在**は今存在する時間です。」
- ヒロシ「それはそうでしょう。」
- 牧師「でもよく考えてみると、現在は正確にどこからどこまでなのか、過去と未来との境目はどこなのかを細かく分けると、どうなるでしょうか？今日がもし現在だとすれば、昨日は過去、明日は未来になります。昼12時から1時の間を現在とすれば、その12時より前は過去、1時より後は未来になります。もっと細かく分けると、一秒間を現在とすれば、その1秒前は過去、その1秒後は未来になります。こうして分けていくと、現在の時間は、瞬間の点になります。その瞬間の点はさらに細かく分けられるでしょう。このように時間が存在するかどうかという論理から分けることは、現在も、瞬間の点としてすぐ過ぎ去るものだということです。」
- ヒロシ「その論理からすると、時間というのは、実はないものだというんじゃないですか？そのように聞こえますが。」
- 牧師「ご指摘のように、時間は無いものか、無いようなものですか？」
- ヒロシ「過去、現在、未来が、無いもの、もしくは無いようなものという、誰がそれを認めるのでしょうか。変な論理で無いというふうに証明しようとしても、実際は皆時間を意識しているのではないですか？」
- 牧師「おっしゃる通りに、すべて人は、過去、現在、未来をいつも意識して生きています。そういう意味で時間は意識の中でははっきり認識できるものです。なぜなら、意識の中で、過去は**⑫記憶**の形として、現在は**⑬直観**（集中による把握）の形として、未来は**⑭希望**の形として存在し続けますから。」
- ④
- ヒロシ「それは何か分かります。」
- 牧師「内面においては、過去はもう過ぎ去った時間ではありません。なぜなら記憶という形で現在化されるからです。未来はまだここに来ていない時間ではなく、期待という形で、現在化されます。すぐ過ぎ去る現在は、直観の形または集中による把握の形で、現在化されます。ところで意識の中にある記憶、直観、期待という時間の要素は、先ほど言いました**⑮自己記憶**、**⑯自己把握**、**⑰自己愛**という精神の三要素と異なるものではありません。ここで、時間の記憶と精神の自己記憶は一致しても、時間の直観と精神の自己把握、時間の期待と精神の愛は、合致しないのではないかと言われるかもしれません。ところが時間の直観と精神の把握は何かの本質を見通すという意味で概念です。そして期待と愛も、何か心が惹かれていい意志が自発的に動くという意味でつながっているのです。」
- ヒロシ「でもこんなことが分かったところで、わたしの現実は何も変わりません。これからは苦しく生きることには変わりありません。」
- 牧師「今ヒロシさんが考えるその現実も絶対変わらないでしょう。でも苦しい生き方は変わる可能性はあると思います。」
- ヒロシ「それは一体何ですか？現実が変わらないと先生も認めたのではないですか？」
- 牧師「現実が変わらなくても、苦しい生き方は変えられます。」
- ヒロシ「それはどういうことですか？」
- 牧師「ヒロシさんは、ある悪人の血と遺伝子を受け継いでいること、そして悪魔の仕業の結果として、ご自分が生まれた可能性があること、それを現実と見なすから、苦しいわけでしょう。」
- ヒロシ「だから、こんな現実においてもいきなり幸せに生きられるということですか？そんなことありえないでしょう。」
- 牧師「すみません。言葉が適切なかどうか分かりませんが、そんな現実においても、苦しい生き方を変える可能性はあると思います。」
- この時、牧師の両目は一瞬光り、真剣な顔となった。そして最後の力まで出し切るかのように姿勢を立て直したので、ヒロシも少し注意して聞こうとした。
- ヒロシ「分かりました。続けて下さい。」
- ⑤
- 牧師「ヒロシさん、先ほどわたしが言いましたが、時間の要素である記憶、直観、期待、そして精神の要素である記憶、把握、愛がご自分の中にもあることは認めますか？」
- ヒロシ「それは当然でしょう。否定しません。」
- 牧師「わたしが信じている神は、永遠の存在、または**⑱三位一体**の神として知られています。永遠の存在にあって、過去、現在、未来は存在せず、永遠の現在、永遠の今だけが存在します。おそらく永遠に生きるということは、**⑲永遠の今を生きる**ことではないでしょうか。」
- ヒロシ「わたしにとっては永遠の今なんか必要ではありません。苦しい今の続きは要らないです。」
- 牧師「わたしも永遠の今が、苦しい今として続かなら、欲しくないものです。もし永遠の存在があるなら、その存在にとっては、苦しくない永遠の今が続くわけですね。もし永遠の存在が永遠の今を生きており、その存在によって人間の魂が肉体に吹き入れられたとすれば、人間の精神や魂は、永遠の存在に似ている存在であると言えるかもしれません。というのは、自分の意識の中に現在化される記憶、現在化される期待、現在化される直観をもっている人間は、魂においてはいつも現時的に生きています。その意味で人間の魂は、永遠の似姿だと思います。」
- ヒロシ「永遠の存在と**⑳時間の存在**が似ているということは、全く根拠の

ない信仰の話でしょう。」  
牧師「そうですね、証明する方法がないですから。話がここまで進んできましたので、最後の話まで言わせて下さい。」

ヒロシ「どうぞ。」  
牧師「わたしが信じる神は三位一体の神としても知られていると言いましたが、三位というのは、**②霊**、**②真理**、**②愛**を示し、この三つが一つとして存在するという意味で三位一体といえます。この三つは、人間との関係において、それぞれの役割が明らかになります。一番目の**霊**は神の存在を人間に思い起こさせます。二番目の**真理**は神の本質や御心が人間に把握されるように啓示します。そして三番目の**愛**は人間を献身的に愛し、救いを与えます。もし三位一体の神によって、魂が肉体の中に吹き入れられたとすれば、記憶、把握、愛という精神の三要素は、**霊**、**真理**、**愛**として存在する三位一体の神に似ていると言えるかもしれません。そういう意味で、わたしは、人間の精神、人間の魂は、**②神の似像**だと信じております。」

ヒロシ「そうですね。それは先生の信仰ですね。」  
牧師「人間の魂が神の似像だというのは、ヒロシさんにはどういうふうに見え、受けとめられるかわかりませんが、わたしにとっては、人間の魂は神様と異なる本性を持っていても、神様の遺伝子のようなものを受け継いでいると思います。」

⑥  
牧師は、話の途中、しんどそうな顔をして、コップの水を飲もうとした。ヒロシは、その話を聞いて、とんでもない話だと思いつつも、少し衝撃を受けた。もう少し牧師の話を知りたいと思った。

ヒロシ「大丈夫ですか？」  
牧師「大丈夫です。ご心配かけてすみません。」

ヒロシ「ごゆっくり、どうぞ。」  
牧師「人間の肉体は、親から血と遺伝子を受け継ぎますが、人間の魂は神様から神様の遺伝子を受け継いでいると思います。あなたがご自分の意識の中に記憶、直観、期待を、ご自分の精神の中に記憶、把握、愛を持っていることは認めましたよね。わたしは精神のその三つの要素は、神様から受け継いだ遺伝子のようなものと確信しております。だから、わたしはあなたに、神様の遺伝子を受け継いだ者として、生きるように強く勧めたいです。わたしが幼い頃のあなたに洗礼を受けたのは、あなたが神様に属する者として、神に愛される者として生きることを切に願ってです。これはわたしの真心です。ご自分の出生という事実は変わらぬ、これからは大変でしょうけれど、ご自分の魂が善の根源である神の遺伝子を受け継いでいることを受け入れるなら、今までのような苦しい生き方が少し変わっていくかもしれません。肉体はいつか滅びますが、魂は不滅です。滅びてしまう肉体のため、ご自分をずっと苦しめないように、お願いします。」

ヒロシは、牧師の話が予想外の展開になっていたので、少し戸惑っていた。しかしまだ心の中に潜んでいる牧師に対する恨みは、彼の言葉を受け入れることを妨げていた。

ヒロシ「先生の話は何となく分かりました。でも妊娠中絶を勧めた先生の口から、こんな話を聞くことも少し違和感を感じます。理想を追いかけてトンネル工事を強行した愚かな**②ヒゼキヤ王**のように、わたしは、理想を求めて、自分の意識の中にある自己存在の否定性という現実の岩盤を無謀に掘り続けることはないでしょう。変わらぬ運命の壁を掘り続けられ続けるほど、自分の傷だけが大きくなりますから。すみません。今日はここまでで十分です。後で時間があつたら、一応先生の話を知りたいと思ってみます。」

牧師「話が長くなってすみません。」  
ヒロシ「いいえ、ありがとうございます。」  
牧師「どこに行っても元気で過ごして下さい。」  
ヒロシ「ええ。それでは。」

ヒロシは挨拶をして、教会を出た。牧師は、玄関まで出て、彼の後ろ姿が消えるまで、ずっと彼を見続けていた。帰り道、自分の精神にある記憶、把握、愛という三要素が神の似像であり、神から受け継がれたものだという牧師の話が、ヒロシの頭をずっと離れなかった。そして牧師の立場を理解しようとする気持ちで、まだ完全に晴れない恨みが、彼の内面で複雑に入り混じっていた。頭の中で何も整理できず、家に帰って深い眠りに陥った。

★本文要約  
①内面の時間の3要素：記憶、直観、期待  
②自分の精神の3要素：記憶、把握、愛  
③これら精神の三要素は神（霊、真理、愛）から受け継がれた神の似像。

★時間論と神の似像：『告白録』から  
①時間は過去、現在、未来と表すことができる。  
②過去はすでにない時間、未来はまだない時間、現在は瞬間の点として消える時間である。  
③しかし内面において過去は記憶という形として、現在は直観という形として、未来は期待という形として現在化される。  
④この現在化される精神の三要素は、自己が自己との関係を可能にするものである。（自己への記憶、自己への理解、自己への期待（愛））  
⑤精神の三要素は、いつまでも永遠な今を生きる神の似像である。（三位一体の神：父＝愛、子＝真理、聖霊＝真理を想起させる方）  
⑥神の似像としての精神の三要素は、自己の創造者である神（父、子、聖霊）との関係を可能にするものである。（神に対する記憶、理解、期待（愛））

第6回 愛  
9 母親の日記を再び読む  
①  
この一週間は、ずっと雨だった。退屈しのぎのため、少しずつ引越しの準備をしたり、いつものように病院でリハビリをしたり、友だちに会ったりした。

また新しい日曜日を迎えた。もう明日は引越しの日だ。明日から新しい町、新しい家、新しい職場で、新しいスタートを切る。でも、彼の心は古いまま、縛られたまま。昼、雨が止んだので、散歩に出かけた。

目的地を決めた、ぶらぶら歩き続けた。気づいてみたら、教会の近くまで来ているのだ。この前の日曜日とは違って、教会の正門には、多くの信徒たちが群がっていた。ちょうどその時、正門から葬儀屋の黒い霊柩車が出てきた。今日お葬式がある日かと思ったが、気になって近づいてみた。そしてある信徒がお葬式について少し聞いた。そうしたら、牧師のお葬式で、病名は末期がんで、抗がん剤治療はせず、緩和ケアだけで頑張ってきたという答えが返ってきた。

その話を聞いたヒロシは驚いてしばらくその場に立ち止まっていた。雨がまた降ってきたため、ヒロシは家に急いで帰った。何ともいえない複雑な気持ちになり、教会の正門を出る霊柩車の映像が目の前をちらついていた。すでに食事済まし、少し疲れたので、ベッドで横になった。

②  
目を覚ましたら、夕方だった。外はまだ雨が降り、淋しい雨の音は、ヒロシの心にも響いてきた。夕食後も、明日の引越しの準備をした。荷物一つ一つ確認して、段ボール箱に積み入れた。ほとんど終了した。気づいたら深夜二時近くになった。家の中を掃除し、寝る準備をした。そして風呂に入り、先週牧師との最後の話をもう一度思い出してみた。自分の出生のため、長年自分の存在を否定してきた彼に、自分の中にある**①神の似姿**を認めて、自己存在を肯定するように説得しようとした牧師の話は、少し衝撃的だった。

しかし牧師の話は、証明できない信仰の話、理想的な話に過ぎず、またそれを受け入れたら、今まで他人から自分から逃避して、固く作って守ってきた**②自己存在の否定性**の殻を、打ち壊さなければならない。ヒロシは、彼の話が全く気に入らなかつたわけではないが、その殻を壊してしまうほどの勇気と動機を得られなかつたのだ。ヒロシは、いかなるものによっても、変えられない自分の現実とその苦しさの鎖から、自分はもう抜け出せないだろうと改めて思った。

風呂から上がり、すぐ寝床に入った。しかし昼寝のせいなのか、なかなか眠れない。ヒロシは電気を付けて、テレビでも見ようとしたが、テレビの横にある母親の遺品がある段ボール箱が目が行った。ヒロシは、その中から、中学生の時読んでしまった母親のあの日記を出した。今じゃないとも二度と読むことはないだろう。そしてもうすべてのことが分かっているし、またあの時のように傷つくことはないだろう。彼はそう思い、しばらくとめくりながら、気になるところを丁寧に読み始めた。

③  
1970年7月〇日 今夏夏の休暇は、二人の友だちと一緒に海で三日間過ごすことになって、本当に楽しみだな。海辺の近くで部屋を借りて、三人で下宿するようになった。存分に夏の海を満喫しよう！…。

1970年8月〇日 浜辺は、たくさんの人でにぎわっていた。…。昼間、三人の男に誘われて、私たち三人は、夜一緒に食事をすることにした。食事の後、二次会として飲み屋に行った。わたしは調子が悪く、お酒も飲めないで、そのまま帰るといったが、二人の友だちの誘いを退くことは出来なかつた。飲み屋で、雰囲気はさらに盛り上がり、皆面白い騒いだ。わたしはその雰囲気に合わせて努力した。しかし徐々わたしは深い眠りに入っていたのだ。気がついたら、すでに翌朝。ところがわたしの体は裸で、その男たちに汚されていた。二人の友だちも、同じ状況だった。睡眠剤を飲まされたようだ。わたしたちは、一緒に泣いた。それから今後のことで相談し、警察に告発した。しかしすぐ犯人たちを捕まえることは難しいといわれた。

1970年10月〇日 先月と今月、メンスがない。八月のあの事件が気になって、今日産婦人科に行ったら、妊娠といわれた。どうしよう。神様、わたしはこれからどうしたらいいでしょうか？本当に悲しいです。

1970年11月〇日 田舎の両親にレイプで妊娠していることを告げようと電話をしたが、いざ母の声を聞いたなら、とても言えなかつた。わたしのことで心配し、病気になるかと恐れ、言うのをやめた。

1970年12月〇日 子供を生むか生むまいか、ずっと悩んでいる。子供が生まれたら、親にも迷惑かけるし、子供もお父さんを知らず育たなければならない。自分も一生十字架を背負わなければいけない。もし妊娠中絶をすると、一人の大切な命を犠牲にすることではないか。その罪悪感から自由になれるかな。わたしは、ずっと引きずるだろう。それも嫌だ。

④  
1970年12月24日 今日毎週通っている教会の30代の若い牧師先生と相談した。先生は、クリスマス礼拝の準備で忙しいのに、長い時間、相談に応じてくれた。わたしは、先生に自分の今の悩みをありのままに告白し、先生の助言を求めた。先生は、**③母体保護法**を根拠にして、レイプで妊娠した場合は、妊娠中絶をしてもいいのではないかとはっきり言ってくれた。そしてわたしを慰め、罪悪感を持たないように、勇気づけようとした。そのように説得している先生に、わたしは「もし子供をおくしたら、神様はわたしをどう思うのでしょうか？」と聞いた。先生は「そのことについては自信をもって言えませんが、あなたの人生のため、そうしても神様は理解して下さると思いますよ」と言った。わたしは、違う角度から聞いてみた。「どう思いますか？わたしがこの子を生むのがいいと思いますか、それとも…。」先生は「子供を生むのが正しいと思いますが、あなたの将来を考えると、とても生むことを勧められません」と答えた。わたしは「この子が生まれたら、先生はこの子を祝福して下さいますか？」と聞いた。先生は「もちろん、あなたが子供さんを生むなら、その子供さんが幸せに生きることを願います。そして喜んで祝福しますよ。しかしわたしはあなたの将来が心配なんです。もし子供さんが生まれたら、きつともっと厳しい現状を受け止めなければならないでしょう。牧師として子供を生むのが善いことだと思いますが、一人の人間としては勧めたくありません」と答えた。わたしは「先生の気持ちはよく分かりました。わたしのことを心配してくださって本当にありがとうございます。もし子供が生まれたら、神様はその子供を嫌うのでしょうか？」と聞いた。そうしたら、先生は「それは…そんなことはないでしょう」と答えた。さらに、わたしは突き詰め

るように質問を続けた。「もしも子供が生まれたら、神様はわたしの子供を喜ばれるのでしょうか?」と。先生は、すぐ答えず黙っていた。わたしは「もしも子供が生まれて、神様がわたしの子供を愛し、その存在を喜ばれるなら、中絶はできないと思います」と言った。先生は「もし子供を生んだら、どんな厳しい人生が待っているか分かっていますか?」と、わたしを説得しようとした。再びわたしは、「わたしの子供を生んだら、神様は、わたしの子を嫌われないでしょうね?」と聞いた。先生は「確かに神様は、その子を愛され、喜ばれるでしょう。けれども、あなたの人生のことも考えないと…」と、最後までわたしのことを心配してくれた。わたしは先生との対話を通して、神様に愛される子供を生むことにした。

1971年1月1日 今日はお正月。実家に帰りたいけれども、帰れない。昨日、牧師先生から思わぬプロポーズをされた。責任をもってわたしこの子を守るから、結婚してほしいと言われた。しかしわたしのような人が先生の奥さんになるなんて、とんでもない。大きな迷惑をかけるばかり。先生のプロポーズに応じるとしても、信徒たちの間で悪い噂が広がる可能性もある。それで断った。本当に涙が出るほどありがたいけど、絶対受け入れられない。神様、これからわたしどうやって生きていけばいいのでしょうか?不安で、怖い。神様、この子を愛して祝福して下さい。神様が与えられたこの子を大切に育てますので、この子とわたしを捨てないで下さい。

## 10 シロアム池のほとり

⑤ ヒロシはここまで読んで、込みあげる涙と悲しみに息が詰まってきた。長い年月、固められ、冷たく閉ざされた彼の心は、二人の**真実**に真正面からぶつかっているのだ。

中学生の時母親の日記を初めて読んでから今再びそれを読むまで、母親と牧師の立場を頭ではある程度理解しつつも、母親の迷いと決断について、そして妊娠中絶を勧めた牧師の人間的な苦悩について、深く考えたことがない。常に自分の存在の傷しか考えなかった。

ところが、レイプで妊娠した子を神に愛される子供として生み、育てようとした母親の**4真実**と、教理を重んじる牧師としてではなく、一人の人間として妊娠中絶を勧めながらも、母親とその子供のことを受け入れようとした牧師の**5真実**は、まるで清い水のように、暗く長い内面のトンネルを通して、深く扱られた**6存在の傷**にまで流れきて、優しく包み、癒そうとしているのだ。

この真実に触れて初めて、自分の存在を否定し続け、生まれるべきでなかった存在として生きようとした彼の固い意志と、彼の存在を肯定し愛される者として生きるように、自分の身を投げ捨てた母親の揺るがない意志との間で、ヒロシは激しく揺さぶられている。

彼は母親の日記を片手で持ったまま、ベッドの上うつ伏せになった。そして顔を枕にくっつけて泣き叫んだ。

「お母さん、これからわたしはどう生きていけばいいですか?いくらもがいても何も変わらないじゃないですか?今まで生きてきたことも苦しかったし、これから生きることも怖いです。私のような人間を生まなかったら、お母さんも楽で、わたしも苦しまなくてもよかったですよ。」

ベッドを叩きながらこのように何度も何度も叫んだ。しかし、この叫びはもはや自分の存在を否定するためのものではない。自己存在の否定性から自己存在の肯定性への**7回心**のための、苦しい身もだえなのだ。

⑥ 少し落ち着いた時、日記の中からぼろりと落ちた一枚の写真に気づいた。母親に抱かれている幼い彼の頭に、牧師が手をおいて祝福している洗礼式の写真だ。それは、この前母親のアルバムで見たあの写真と同じものだった。

写真の裏には、「神様、私に与えられたこの大切な存在を守って、祝福して下さい」と手書きで記されていた。

この写真と言葉を見て、まるでイエスに送られ、シロアム池で自分の目を洗い、光を得ることができた、あの目の不自由な人のように、彼は、母親の心の池からほとばしる清い**真実**の水に、暗い心の目を洗い、癒されつつあった。

この池のほとりで、今までばかばかしく見えた母親の理想的選択も、恨んできた牧師の現実的勧めも、いつの間にか彼に納得できるものに変わっていた。

この池のほとりで、レイプで妊娠させられたこと、相手が誰なのかも知らないのにヒロシを生もうとしたこと、その彼を一人で育てたこと、彼の出生の秘密を両親にも彼にも隠さなければならなかったこと、しかし彼がそれを知り、傷つけられてしまったことなどは、すべて、母親にとって巨大な岩盤のようなもので、母親は神に愛される子供を生んで育てるという理想のため、その岩盤を一人で掘り続けてきたことが分かった。

そして、母親がその岩盤を掘り続けたことは、今彼にとって、決して無意味でも失敗でもなかった。なぜなら、母親のものが続けたその努力は、今聖なる**真実**の水となって、不治の病のような彼の存在の傷を少しずつ癒しているからなのだ。

この池のほとりで、ヒロシは自分の出生の問題による自己存在の否定性の殻を壊し、それによる現実の苦しみの鎖を断ち切りたくなった。自分が神に愛される存在として生きることまでは考えていないが、悪の根源と自分との関係を否定し、善の根源とのつながりを肯定したくなった。さらに、もし牧師が語った**8自己記憶**、**9自己把握**、**10自己愛**が善の根源の似姿で、それによって善の根源と関係性があるとすれば、その似姿は、ありのままの傷つけられた自分を記憶し、その自分を客観的に把握し、それにもかかわらずその弱い自分を愛することにに関わり、この似姿を肯定することは、自分の存在を肯定することを意味するかもしれないと思った。

今彼は、母親の心から湧き出る**真実**の池のほとりで、理想の道を選んだ母親の強い思いに促され、自分にとって理想の道が何なのかを考えている。そして自分の理想の道は、母親の理想の道を肯定し、それを生かしていくことであり、掘っても掘っても先が見えない自分の心の暗いトンネルを、掘り続けることであると確信するようになった。

しかし自分の理想へ第一歩を踏み出すのに、彼にはまだ不安と迷いがある。一つ確かなことは、その理想の道がもう嫌なものとして見られていないということである。

## 11 新しい生活へ

⑦ 一番深い夜は、一番純粋な夜。一番純粋な夜は、一日中で一番寂しく、怖い時も。しかしその夜空には、はるばると遠くから届いた無数の光の饗宴が催され、寂しく怖い闇はその光の中へ溶け込んでいく。

その日の夜、ヒロシは、自分の内面の最も暗く純粋な淵において、遠い過去から照らされ続け、やっと届かれるべきところにとり着いた**真実**の光を見ていたのだ。そしてその光に陶酔し、深い眠りについた。

翌朝、予定通りに引越し業者の作業員たちがやって来た。そして素早く荷物を一つ一つトラックに運び込んだ。

この一週間ずっと雨だったけれど、嘘のように雲ひとつない晴天だ。荷物を積み込む作業がすべて完了した。ヒロシは家の外と中を確認した後、そのトラックと一緒に乗り込んだ。トラックは、大きな音を出しながら、古い生活の場から新しい生活の場に向かって動き出した。自分を縛るすべての過去から、自由が待っている未来への第一歩は、こうして始まった。ちょうどトラックが教会の前の道を通る時、ヒロシの目の前から、一匹の鳥がばたばたしながら空高く上昇していた。

### ★『純粋な夜の向こうへ』の整理

①「自己存在の否定性」と「自己存在の肯定性」  
：自己存在の否定性の中の自己存在の肯定性  
：「自己存在の肯定性」は**幸福**への欲求。(生きる=存在する=幸福)  
：「自己存在の否定性」は**幸福**への絶望。

②**悪の根源**：悪しき意志

③**善の根源**

時間の三一性：過去、現在、未来

精神の三一性：記憶、直感、期待

自己記憶、自己把握、自己愛(神の似像)

三位一体の神：真理(愛)を想起させる霊(聖霊)

真理(愛)を啓示する子(イエスキリスト)

真理(愛)そのものである父(ヤエウエ)

④愛の真実さ：シロアムでの出来事のように内面の目を洗い、清める力。

### ★愛について

①人は、たとい悪ですら、**愛**なしにはなし得ない。姦淫、非道な行い、殺人、放蕩などを働かせるのは愛ではないだろうか。だからあなたの愛を清めよ。下水道に入る水の流れを庭園のほうに向けよ。愛せよ。あなたの愛しているものが何であるかに注意せよ。

(清めるべき愛)『詩篇講解』第31

②愛のはじまりは**聖**のはじまりである。愛の成長は聖の成長である。愛の大きさは聖の大きさである。愛の完成は聖の完成である。・・・この世の生を終れたのちに、愛が成長する場所を失うということはないだろう。

(愛=聖=永遠の成長)『三位一体』第8巻第8章

③人間は目で兄弟(仲間)を見るが、それによって**神**を観ることはできない。しかし目で見る兄弟を、もし霊的愛(聖なる愛)によって愛するならば、愛そのものである神を内的な目で見ると。神は愛によって見られるのである。(霊的愛→内面の目→神を観る)『自然と恩寵について』第84章

### ★愛の秩序：『神の国』など

①愛はわれわれの意志の原動力である。

②そのため、愛を愛するか、つまり何を正しく選択するか、は道徳的秩序の現実化へ促す。

③神(絶対的善)へ導くことが出来るものを欲する、純粋で誠実で献身的な愛をカリタス(caritas)の愛というが、愛はカリタスにおいて完成する。

④カリタスの愛は隣人への愛と神への愛を可能にし、道徳性の核心・生命として道徳的生を支配する。

⑤そして、カリタスの愛は自由意志と深く関わる。意志は自由において完成し、自由は愛においての自由である。愛の自由の頂点に神への服従が位置づけられ、この自由は神の恩寵によってのみ可能であるものである。

⑥このような愛の秩序(道徳的秩序)の展開が、神の国という社会的秩序、すなわち神の愛に基づいた他者との共同体における生である。

⑦神の国は永遠の平和の享受へと関係付けられるが、それに対して、悪魔の国と呼ばれるこの世の国は神を侮るまでに高じた自己愛に基礎付けられ、地上的平和の享受へと関係付けられる。

⑧二つの国の市民は同時に生き、混じり合っており、人類の歴史も神の国と悪魔の国との関係の歴史である。